

原木シイタケ再興へ 独自ブランド「サホロ椎茸」立ち上げ 新得・元協力隊員の正脇さん「本当のおいしさを」

2019年10月30日

新得町の元地域おこし協力隊員の正脇健次さん（42）が、原木シイタケの独自ブランド「サホロ椎茸」を立ち上げた。町内でかつて盛んだった原木シイタケ産業の再興を目指している。



林の中からハウス内に移した櫓木から、次々に育つシイタケを確認する正脇さん

正脇さんは神奈川県出身。民間企業勤務を経て、2016年にシイタケ生産推進担当の協力隊員として家族5人で町に移住した。新得の環境と、移住前の視察で知った原木シイタケのおいしさが決断を後押ししたという。原木シイタケ農家でつくる「町しいたけ生産組合」の指導で栽培方法を学びながら準備を進め、4月に独立した。

サホロ椎茸の栽培には、ミズナラの原木を林の中で腐朽させた「櫓木（ほだぎ）」を用いる。十勝の寒冷な気候のため、原木の切り出しから収穫まで2年かかるが、正脇さんは「シイタケの本当のおいしさを追求したい」と話す。

原木シイタケは栽培に手間がかかることや、原木を供給する林業の人手不足などで全国的に減少している。安定して生産できる菌床シイタケが普及し、現在では全体の1割程度。町内でも最盛期には十数戸が原木栽培を行っていたが、現在、組合員数は正脇さんを含め4戸、組合員の中でシイタケ専業は正脇さんだけという。

当面の生産量は年間4トンが目標。組合を通じて出荷する他、ネット販売を行っている。すでにSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）やホームページで、趣味の写真を生かして情報発信しており、好評を得ているという。年内には栽培所（町西4南6）での対面販売も始める予定。

「協力隊としてはあまり貢献できなかったが、自社ブランドを通じて新得の原木シイタケの知名度を上げていきたい。よりおいしい菌種を使ったハイエンド商品も開発していきたい」と意気込んでいる。

牛のデータ共有 電子カルテ 開発進む 音更のベンチャー「ベッテル」

2019年11月12日

音更町で7月に設立した農業関連のベンチャー企業「VETELL」（ベッテル、池田哲平社長）が、来春完成を目標に牛の電子カルテ「vetell」の開発を進めている。同社によると、酪農家と獣医師が使用できる共通の電子カルテはこれまでになく、池田社長は「牛の管理の様子を『見える化』することで、病気を減らせるなどメリットが大きい」としている。



電子カルテの開発を進めるVETELLの池田社長。現在は試作段階で、来春完成を目指している

電子カルテ上では、酪農家が牛の個体ごとに餌の摂取量、食欲、使った薬などのデータを入力。データは電子カルテ上で獣医師と共有する。

平常時から個々のデータを共有することで病気への対応が迅速になり、予防や経営改善につながる。まずは農家と獣医師間での利用とし、将来的には人工授精師、飼料メーカー、農協関係者など、関わる全ての人が利用する電子カルテとしたい考えだ。

従来は、酪農家が牛の状態を紙ベースで記録していてもリアルタイムで共有する方法がなく、病気にかかった際に獣医師に一から説明をする必要があった。

現役の獣医師でもある池田社長はこうした点を改善しようと、8年ほど前から開発を構想。外注先の協力も得て開発を進め、現在、試作版を農家に使ってもらいながら、来春に向けて改良を進めている。

契約は牧場ごとで、使用料は現在検討中。池田社長は「これまでは農家が記録しても資料が散乱している場合もあり、病気の正確な検証が難しかった。記録を時系列で残し、共有することで経営改善にもつながる」と話す。